

不登校児童生徒への対応事例1（小学校第1学年男子） ～電話及び来所相談における早期対応と家庭・学校との連携～

問題の把握

相談者の子どもは夏休み明けから、断続的に欠席が続いている。母親は欠席の要因として、書字の困難さがあり、学習に取り組む意欲が低下し教室に入れなくなったと考えている。学校では、学級担任や特別支援教育コーディネーターが中心となり校内での対応に努めている。相談者は、学級担任から当センターの教育相談を紹介され、来所した。

対応状況

1 相談機関の対応

(1) 電話相談の内容（9月上旬）

- ・保護者からの電話で状況について話を聞き、子どもの行動上の特徴について聞き取りを行った。
- ・保護者に教育相談における心理検査の目的やその結果の扱いについて理解を得ながら来所相談を促した。

(2) 来所相談の内容（10月上旬）

- ・子どもの生育歴、養育の状況、学校での教育、支援状況を把握し、状況の整理を行った。
- ・子どもの状況から必要と思われる検査を実施し、諸検査の結果、視知覚認知発達等から子どもの状態像をとらえて、保護者に伝えた。
- ・子どもへのかかわり方として、以下の助言をした。
 - ①安心感をもって学校で生活するために、視覚的な手がかりを提示し、学習活動の見通しをもたせること。
 - ②視知覚認知の発達、視機能の向上を促すことにより書字能力の向上を図り段階的に取り組むこと。
 - ③子どもが少しでも活動に参加できたり、意欲がみられたらほめること。
 - ④保護者から学校に来所教育相談の結果について伝えることで、学校との連携を図っていくこと。

(3) 来所相談の内容（10月～12月）

- ・学校の具体的なかかわり方や家庭での書字に関わる取組についての状況を確認した。
- ・本人に視知覚や視機能にかかわる取組から視機能が向上していること、文字がマスに収まったり、形が整ってきたことを称賛した。
- ・今後も、視知覚認知と視機能の向上を促す課題に取り組み、来所時に経過をとらえながら、書字能力の向上のために段階的に取り組むように提案した。

2 相談者の変容

- 学校の配慮で個別指導の場面を設定したり、視覚的な手立てを準備したりすることで給食の時間や帰りの会の時間に参加ができるようになり、毎日登校するようになった。
- 書字への自信が付き、作文や漢字練習、絵画など取り組めるようになった。

不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・保護者の心情に寄り添いながら、不登校の状況や発達の状態を具体的に把握し、解決の方策を探る相談を行うこと。
- ・子どもに適切な支援をするためには、子どもの状態像をとらえて、発達や認知処理の特性からかかわり方について考えること。
- ・保護者の了解を得て、各学校等への速やかな情報提供を行うこと。
- ・保護者、学校とが相互に情報交換し、子どもの状態像や発達や認知処理の特性について共通理解すること。